

2012. 11. 15

# JADCI NEWS No. 37



The Japanese Association for Developmental & Comparative Immunology

## 目次

- 新会長挨拶
- 新役員挨拶
- JADCI・ISDCI 参加記
  - 「第 24 回 JADCI 学術集会・第 12 回国際比較免疫学会の参加記」柴田俊生
  - 「ISDCI FUKUOKA 2012 を終えて」長澤 貴宏
- 「Grief Care - 藤田恒夫先生の死」古田恵美子
- 平成 24 年度日本比較免疫学会総会議事録
- 事務局からのご連絡とお願い

日本比較免疫学会 役員 (2012.9～2014.8)

会長：笠原 正典 (北海道大学)

副会長：中尾 実樹 (九州大学)

庶務・会計：倉田 祥一郎 (東北大学)、補助役員 矢野 環 (東北大学)

学術集会担当：丸山 正 (海洋研究開発機構)、末武 弘章 (福井県立大学)

会計監査：中西 照幸 (日本大学)、川畑 俊一郎 (九州大学)

広報担当：飯島 亮介 (帝京大学)、広瀬 裕一 (琉球大学)

発行者：日本比較免疫学会長 笠原 正典

事務局：庶務担当 倉田 祥一郎

住所 〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-3

東北大学大学院 薬学研究科 生命機能解析学分野

事務局 e-mail: jadci2office@gmail.com

電話 022-795-4555 (ダイヤルイン) FAX 022-795-6802

郵便振替 口座番号 01730-9-80586

加入者名 日本比較免疫学会

学会ホームページ <http://plaza.umin.ac.jp/~jadci/>

## 会長就任のご挨拶

日本比較免疫学会会長 笠原 正典

北海道大学大学院医学研究科 分子病理学野

この度、吉田 彪前会長のご推薦を受け、日本比較免疫学会会長に選任されました。歴代の会長をはじめ先達の先生方が築いてこられた歴史と伝統を大切に、本学会の更なる発展に微力を尽くしたいと思います。会員の皆様にはご支援、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

本学会では平成 19 年に活性化委員会から、「JADCI (日本比較免疫学会) 活性化のためのアクションプラン」という答申が出されております。詳細は JADCI NEWS 32 号に掲載されておりますが、そこでは若手の学術集会への参加と発表の奨励、国内他学会との連携強化、ISDCI (国際比較免疫学会) との連携強化、広報活動の強化、学術集会開催体制の確立などが謳われています。いずれも大変重要なご提言だと思いますので、まずはこれらの具現化に向けて努力したいと考えております。若手の学術集会への参加・発表奨励、広報活動の強化、学術集会開催体制の確立に関しては、すでにいくつかの策が施されていますが、さらに取組みを強化してまいりたいと存じます。

一方、ISDCI、国内他学会との連携強化は本学会の長年にわたる懸案でしたが、なかなか進捗しない面がありました。しかし、ここに来て機が熟してきたように感じております。まず、副会長を

お引き受け下さった中尾実樹先生が今年から ISDCI の会長にご就任になりました。また、平成 26 年には日本比較免疫学会が、今回、庶務・会計担当役員にご就任いただいた倉田祥一郎先生を会長として、仙台市において日本生体防御学会と同時開催されることになっています。これを機に ISDCI、生体防御学会との交流をさらに深め、連携強化を図ってまいりたいと思います。また、吉田前会長から学会としての独立性を保ちつつ、日本比較生理生化学会、日本比較内分泌学会と学術集会を同時開催してはいかかかというご提案もいただいております。これに関しても会員の皆様のご意見を頂戴しながら検討してまいりたいと思っております。

吉田前会長も力説されておられましたが、学会の活力は何と言っても、会員がどれだけ魅力的な研究を行なっているかにかかっています。皆様には、質の高い魅力的な研究成果をどしどし比較免疫学会で発表していただきますようお願いいたします。そうすれば、おのずと若い人が集まり、学会の活性化がもたらされるでしょう。学会の運営に当たっては、皆様のご意見が最大限反映されるよう努力します。どうか忌憚ないご意見をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

## やっと来た、ついに来た ISDCI 2012 congress

日本比較免疫学会副会長 中尾 実樹  
九州大学大学院農学研究院

本年 7 月 9 日～13 日に、第 12 回国際比較免疫学会学術集会 (ISDCI 2012) を第 24 回 JADCI 学術集会との同時開催という形で、福岡にて開催させていただきました。36 年間の ISDCI の歴史の中で、その学術集会は初めてアジアに、そして日本にやってきました。お陰様で、日本を含む 21 カ国からおおよそ 260 名の参加者を得て、136 演題の口頭発表と 115 演題のポスター発表が 15 セッションに分かれて発表されました。さらに、JADCI が企画した比較生物学シンポジウムも集会初日に開催され、活発な質疑が交わされたことは大きな喜びです。個人的には、集会長としてまさしく夢のような 5 日間を過ごさせていただきましたが、これも JADCI の皆様の励ましとご支援のおかげです。ありがとうございます。なお、ISDCI 2012 の簡単なレポートとスナップ写真を ISDCI 2012 ホームページ (<http://isdc12.net/>) でご覧いただけます。

さて、JADCI が 24 年前に ISDCI を誘致していたことは余り知られていないかも知れません。1991 年開催の第 5 回 congress の宇都宮・つくば開催を目指したのは、古田恵美子先生、友永進先生、和合治久先生を始めとした日本の比較免疫学者有志の先生方でした。これは 1989 年に日本比較免疫「学会」が設立される前年の話しです。JADCI を学会として生み出すだけでなく、国際学会を誘致しようという JADCI 創始者の先生方の情熱に感嘆するばかりです。残念ながら、あの時の ISDCI は日本開催の素晴らしさを理解できず、第 5 回 congress 開催地はオレゴン州ポートランドに

決まってしまいましたが、あれから 24 年経って、ISDCI はついに日本にやって来ました。本稿では、福岡開催に至る幾つかのエピソードをご紹介します。

2006 年 7 月：米国チャールストンで開催された 10th ISDCI congress に参加した際に、「そろそろ日本で開催してはどうか？」という欧米の人々の声を聞きましたが、「いったい誰がやるの？」と思っていました。一方で、中国の元気の良さも目立ち、もしかしてアジア初の ISDCI congress は中国開催か？という雰囲気も感じました。折しも日本では JADCI 活性化の必要性が叫ばれており、ISDCI congress 開催は JADCI 活性化に役立つのではないかと、なんとなく考えていました。「アジア初」が日本でないことも嫌だな、という思いもあったかも知れません。

2009 年 3 月～6 月：2009 年夏から ISDCI 会長に就任予定だった Val Smith さんを九州大学の非常勤講師として招聘した際に、12th Congress を日本で開催してはどうか？と仄めかされた気がします。当時のメールを振り返っても、どのように決心したのか我ながら判然としませんが、結局 5 月 8 日には「I have finally decided to propose to host ISDCI 2012 in Fukuoka. ...」と Val にメールしています。九大の川畑先生、北大の笠原先生、東北大の倉田先生、東大の野中先生、そして日大の中西先生に「2012 年開催が実現いたしましたら、Scientific

Committee として、Congress 全体のセッションのデザイン、Plenary Speaker の選抜などにお力添えをいただけませんか。」と、ご協力を懇願したのは 6 月に入ってからでした。今思えば Val へのメールと順番が逆ですね。とにかく突っ走ってしまいました。

2009 年 7 月：プラハで開催された 11th ISDCI congress の役員会にて、10 分間の誘致プレゼンテーションで「福岡は交通の便が良く、外国人に友好的でエキゾチックな街」と宣伝しました。行く前は、中国の G 市が対抗馬だと予想していましたが、実際にはアメリカの A 大学との選択でした。実は投票結果の票数など詳細は今でも知らないのですが、とにかく 2012 年開催地は福岡に決まりました。それが総会でアナウンスされた時の歓声・喝采に震える思いでした。

2010 年 4 月：当初は福岡国際会議場での開催を考えていましたが、ISDCI の役員から「会議場と宿泊施設を同一としてコンパクトな集会にしてほしい」との要望が強いことを考慮し、ホテルでの開催を決心しました。3,4 社のコンベンション運営会社に見積もりを出してもらって、結局、Sea Hawk ホテルを利用したプラン

を採用しました。

2011 年 8 月：第 23 回 JADCI 学術集会において、第 24 回 JADCI と ISDCI 2012 を同時開催する案を認めていただきました。その時の安堵感と、T 先生からいただいた「これは去年に片付いていなければならなかったね。」というコメントが忘れられません。その月のうちにお手製のホームページを立ち上げ、Scientific Planning Committee に Plenary Speaker を選出させていただき、さらに 2012 年 2 月に参加受付をホームページで開始しました。5 月に演題受付を締めきってから怒涛のラストスパートでした。アドレナリンをフルに分泌してなんとか乗り切りました。それでも気を失いそうになった私にカンフルを打って助けてくださった皆さんに心から感謝申し上げます。

次回の ISDCI congress は、2015 年にスペインのムルシアで開催されます。JADCI の皆様のご参加を、ISDCI President として心からお待ち申し上げます。

## 新事務局より

庶務・会計担当 倉田祥一郎  
東北大学大学院薬学研究科

笠原正典新会長の就任に伴いまして、事務局が九州大学から東北大学に移りました。まずは、2006年から6年もの間、事務局の労をお執りいただいた中尾実樹先生と杣本智軌先生に心から感謝申し上げます。これまでの獨協医科大学、日本大学、九州大学での事務局のように、到底上手くできませんが、JADCIの円滑な運営のために努力いたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

事務局の役割の中に、会員間の研究交流の促進と、学会・学術集会の活性化の促進があると考えております。既にお気づきの方もいらっしゃると思いますが、広報担当役員の広瀬裕一先生のお骨折りで、JADCI Newsが、記念誌「飛翔」と共に、第1号から学会HPでダウンロードできるようになりました。JADCIが設立された年に、名取俊二先生の研究室を卒業した、いわゆるJADCI第2世代ですので、これまで初期のNewsを拝見することはできませんでした。学会設立当時のなみなみならぬ熱気や、我が国の比較免疫学をリードされてきた先生方が、その当時何を想い、また私たちと同じように悩みながら研究を進めてこられたことに触れることができ、大変勇気づけられました。学術集会の懇親会の折には、先生方に詳しいところをお伺いしたいと楽しみにしています。ぜひ、第2世代、第3世代の方々にはご一読をお勧めいたします。今後、学会HPと希望する会員の研究室HPと相互リンクを行うことも検討しています。

2007年に提言された「JADCI活性化のためのアクションプラン」にもある、国内の他学会との連携強化に関連しまして、第26回学術集会は、日本生体防御学会との「同時期開催」の予定です。2001年に、岩永貞昭先生から生体防御学会との合同大会の提案がなされたことが、JADCI Newsに記載されています。第26回集会は「合同大会」ではありませんが、それぞれ個別に集会を開催するものの、両者を同じ会場で連続して開催して、中日に特別講演、シンポジウム、各種受賞講演、懇親会を共有することになります。また、経費が許せば、一つの学会へ参加費を支払うことで、他方の学会発表を聴講できるようにしたいと考えております。日本比較3学会で、合同シンポジウムのあり方を検討しています。第26回集会以の問題点などを踏まえて、新たな連携強化を検討したいと考えております。

言うまでもなく、会計は事務局の一番大事な役割です。会計年度が4月から翌年3月までであることから、平成24年度の会計は、旧事務局の中尾先生と杣本先生に、引き続きお願いしております。平成25年度の会費徴収から東北大学事務局が担当します。2月末から3月初旬に、平成25年度の会費入金のご案内を、第25回学術集会のご案内と共に差し上げますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

事務局へのご要望などありましたら、[jadci2office@gmail.com](mailto:jadci2office@gmail.com)までお寄せくださいますようお願いいたします。



## 学術集会担当役員として

学術集会担当 丸山 正  
独立行政法人海洋研究開発機構

今年度より、学術集会の担当を引き受けることになりました。経験はあまりありませんが、努力したいと思っております。

最近、多くの生物種でゲノム解析を初めとするオミクスと呼ばれる生体成分の網羅的な解析のスピードが速くなり、生物学に関する情報が洪水のように溢れて来ています。それに伴って、対象生物に関する情報が、研究者の専門分野だけにとどまらず、直接関係しない分野についても同時に高精度に出てくるような時代になってきました。このような状況は、研究者としては、より広い総合的な視点から研究することが出来るようになったといえるように思います。しかし、視野を広くすることはそれほど容易ではありません。そのような総合的な視点を持つには、研究者同士のネットワークをうまく作ることが重要ではないでしょうか？最近では IT 革命により情報そのものへのアクセスの仕方が変わってきました。デスクに居ながら、非常に多くの研究情報を得たり、インターネットで会議を行うようなことも可能になっています。そのような状況における学術集会の存在意義は何かと考えると、より良い研究者間のネットワークを研究者が直接会って交流しながら形成するための場の提供なのだろうと思われま

す。本学会がこれまで参加している、比較三学会（比較生理生化学会、比較内分泌学会、比較免疫学会）という場合は、上に述べた総合的な視点を持

つために重要な機会を提供しているように思われます。

私は、共生現象に興味を持って研究を行っていますが、上に述べたオミクス解析の波の影響はやはりいろいろなところに出てきているように思われます。例えば、以前は人間の腸内細菌は、あまり共生と言う視点では見られていなかったように思われます。しかし、最近では腸内細菌も共生細菌という言葉で表現されるようになり、それらの細菌と腸管細胞の相互作用で大腸菌 O157 の感染が抑制されるようなことが明らかになってきました。その意味で、人間に限らず、多くの生物は、その生物だけでは存在できず、周囲の非常に多くの微生物との複雑な相互作用によってその生活が支えられているという考え方が出来るようになってきました。そのようなある生物とその周囲の（微生物を含む）生物の総体をホログenomと言ったり、メタオルガニズムと言ったりします。そのような総体の維持には、免疫は中心的な機能を果たすし、また、同時に体内の多くの生理生化学反応や内分泌機能も関与してくると思われま

す。このように生物あるいはその周囲も含めて、総合的にどのように見ていくかということを考える場としての三学会の学術集会が持つ意味は大きいと思われます。今後、そのような意識で、三学会学術集会をより魅力的なものにすべく努力してまいりたいと思っております。

## 学術集会担当役員挨拶

学術集会担当 末武 弘章  
福井県立大学海洋生物資源学部

10年以上日本比較免疫学会の学術集会担当役員をされた中村弘明先生、そして橋本香保子先生のおあとをJAMSTECの丸山正先生とともに引き継ぐことになりました。微力ながら学術集会運営のお役に立てるよう尽力します。会員の皆さんのお力添えのほどよろしくお願い致します。これまでの学術集会担当役員の主な仕事は、①プログラム委員会での一般講演のセッション設定・座長案作成、②講演要旨集の作成・印刷会社への対応、③比較3学会合同シンポジウムの世話人と聞いています。今後は、①と②については、学術集会長・事務局を中心にまとめることに移行し、そのサポート、印刷手配を行うこととなります。私からのお願いとしては、会員の皆さんには毎年1題以上演題を出していただくことです。単純かもしれませんが、よく話題に上る活性化はこういうところから始まるのではないかと考えています。もう一つの仕事は、③比較3学会合同シンポの世話人ですが、ここは大きくは変わりません。日本比較免疫学会の学術集会では3年に1回しかシンポが行われないので影が薄いというのも否めませんが、個人的には好きです。各分野のエース級が来て講演をするたいへんエキサイティングなシンポだと思っています。担当役員は3年に1回しか仕事をしないのではないかと、そういう訳ではなくて、毎年各シンポのテーマに合った演者に日本

比較免疫学会として講演依頼する役割があります。講演を頼まれた方はぜひともお引き受け願います。

私は、これまで比較3学のどれにも顔を突っ込んできました。生え抜きの免疫研究者ではありません。学位論文は魚類の内分泌の研究であり、長らく日本比較内分泌学会の会員でもありました。また、授業では動物生理学を受け持っており、出身研究室は水族生理学です。論文もDCI, GCE, CBPのどれにも出してきました。敢えて言えば「3学」を比較したと言えるかもしれません。それ故に、それぞれの面白さと同時に、どの分野においても閉塞感のようなものを感じていました。面白い生命現象があるが、それを説明する手立てがないというのが一つの要因であったと思います。ここに来て、次世代シーケンサーやTALENなど非モデル生物研究推進のインフラが整いつつあり、モデル生物でしかできなかった研究が可能になってきました。実際、非モデル生物のエコゲノミクスなどが盛り上がっています。比較生物学にとっても、閉塞感を吹き飛ばすリバースイノベーション(?)のチャンスではないかと考えています。面白ければ若手は自ずと集まってきます。面白さを伝える場が論文であり、学術集会であると思います。学術集会担当として、面白い研究を伝えるお手伝いができればと思っています。



## 水産用ワクチンの普及と魚類免疫学研究の発展

会計監査 中西 照幸  
日本大学生物資源科学部

この度の会計監査就任に際し新役員挨拶を兼ねて、魚類免疫学研究発展の経緯と今後の展望について、簡単に述べさせていただきます。

私が大学院博士課程において魚類の免疫学研究を始めた 38 年前には我が国には魚類免疫の専門家がおらず、魚病学会において免疫・生体防御に関する発表は 1 題程度でした。時には 3 分の 1 程度を免疫関連の発表で占める現在の活況ぶりは、当時からは想像できないものです。こうした状況は、2005 年を境として水産用（魚類）ワクチンの販売額が水産薬の売上げを上回るようになり、ワクチンの普及とともに連鎖球菌症やイリドウイルス病の発生が養殖現場で急激に減少していることと軌を一にしています。

このような水産用ワクチンの普及の背景には、耐性菌の蔓延、薬剤の残留に対する消費者の関心の高まり、薬剤による治療が難しいウイルス性疾病の蔓延に加えて、ノルウエーなどにおけるワクチンを用いた魚類防疫対策の成功に刺激された政府の治療から予防への大きな政策転換があると思われます。

魚病学の歴史をみると、養殖が始まると先ず魚病の診断が必要となり、寄生虫、細菌、ウイルスなどの病原体の分離や同定のための研究が活発となります。しかし、病原体の分離や同定が一段落すると、やがて社会や経済の発展とともに上記の薬剤を用いた治療の限界と問題点がクローズアップされ予防を中心とした防疫対策が進められるようになります。

同様な動きが今後隣国、特に中国で起きてくる

と思われます。しかも、我が国で数十年要した治療から予防への流れはもっと短期間に進むことが予想されます。現在私は、Fish & Shellfish Immunol. や Vet. Immunol. Immunopathol. など幾つかの雑誌の編集委員をしておりますが、ここ数年これらの雑誌に投稿される論文の半数近くが中国からのものになってきています。まだ大半は”extension”の研究ですが年ごとにレベルが上がってきており、中には J. Immunol. に掲載される論文も出てきています。この背景には、魚類におけるゲノム解析の進展と中国における最近の経済発展が考えられ、このような状況は今後も続くと予想されます。

このような動きは現在東アジアで起きていますが、いずれは東南アジアから西アジア、さらにアフリカ諸国に広がっていくと思われます。このことは私自身が受け入れた海外からのポスドクや研修生を通して身近に感じています。当初は、米国やヨーロッパからポスドクを受け入れてきましたが、そのうち中国からとなり、さらにインドやバングラデシュを経て現在はエジプトから来ています。

養殖業の拡大・発展に支えられて、今魚類免疫学は質・量ともに著しく発展しており、地理的な広がりを見せています。このような中で、今年初めてアジアで国際比較免疫学会が開催されたことは大変意義深いと思います。日本比較免疫学会がアジア地域の中核となって活動を進めていく上で、微力ながらお手伝いできればと考えています。よろしくお願い致します。

## ご挨拶

会計監査 川畑 俊一郎

九州大学大学院理学研究院生物科学部門

今回、日本比較免疫学会の会計監査を担当することになりました。どの研究分野においても共通することでしょうが、学会というコミュニティが正常に機能し、かつ維持されるためには、若手、中堅、ベテランが、個々のキャリアを超えた忌憚のない討論で、お互いを切磋琢磨することができる集団であることに尽きると思われまふ。すなわち、各研究者層の量的かつ質的バランスが不可欠です。そのためには、いづれの研究者層にも魅力あるコミュニティにすること、例えば、若手には研究発表の機会だけでなく、就職や研究ポスト

情報を提供し、中堅には研究者ネットワーク形成や新規研究課題の開拓を促進し、ベテランには継続的な研究資金の獲得に寄与することができることです。まずは、若手院生、ポスドク、助教等の若手研究者をいかに引き入れるかが、キーポイントになることは言うまでもありません。現会員の皆様の魅力的な研究の推進をお祈りいたしますとともに、学会での積極的な演題発表や示唆に充ちたご討論を、今後ともよろしくお願ひいたします。

## 広報担当として

広報担当 飯島 亮介

帝京大学薬学部

これまでは抄録担当として、学術集会の proceedings や、集会長にお書きいただいた meeting report を編集し、Developmental & Comparative Immunology 誌に投稿する、という役割に従事して参りましたが、吉田前会長の「実働は年間数日だけでしょう？」とのご発言に対して抗う言葉を持たず、この度ニュースレター発行のお手伝いをさせていただくことになりました。思い返せば、しばらく前に、ホームページ担当の広瀬先生とともに新設の広報担当を仰せつかったことはこの伏線であり、その意図するところは学会事務局に集中する業務を分散し、かつ広報活動にも力を入れるべしとのことでしょうか。

いろいろな方がご指摘されているように、本学会には、専門の近い研究者ばかりが集まった、こぢんまりとした心地よさがあるかと思ひます。しかしながら、この学会が活気を持って存続するためには、新しい人や空気を大いに取り入れる必要があることもまた確かなことと思ひます。

情報を発信することで、周りに気づいてもらうこと、興味をもってもらふことも広報の重要な役割と考えています。ニュースレターのホームページでの公開も始まりました。皆様から様々なコンテンツを提供いただき、内だけでなく外にも伝えていきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

## 学会 Web Site で何ができるでしょう？

広報担当 広瀬 裕一  
琉球大学理学部

「新役員から」ということで、何か一文をと依頼いただいたものの、なかなか辛いものがある。一つは学務との兼ね合いで私が長らく学術集会に参加していないユウレイ会員であるということと、学会ホームページ担当を 2001 年から勤めているので「新」と言うにはおこがましいということである。所属が沖縄の大学ということで、(主に東京で開かれる) 役員の集まりにも全く参加しておらず申し訳ない次第であるが、学会 web site の更新を一手に引き受けているということで勘弁していただいている。

長いこと JADCI の web site を担当してきたので、当初はかなり面倒だった更新作業にも慣れてはきている。一方で、私が学術集会に出席できなくなって久しく、私の研究分野も『免疫』からかなり逸脱してきたこともあり、現在 JADCI で活発に活躍されている、特に若手の会員とは面識もなくなってきている。従って、現在の比較免疫学会のニーズと私の理解との間にズレが生じているだろうと危惧している。次の(できれば若い) 人にバトンタッチすべき時期であろう。もちろん、笠原新会長より広報担当の留任をお引き受けした以上は、今期の役割はしっかり果たしたい。だが、この 2 年間に次の担当者への『つなぎ』と考えてもいる。この点は、会員の皆さんにもご理解いただきたい。

さて、現在の web site はどの程度お役に立っているだろう？ これを読んでおられる方の中で、<http://plaza.umin.ac.jp/~jadci/> をブックマークされている方はどのくらいあるだろう？ web site では

学術集会の案内や古田賞・奨励賞の募集などを主な更新内容としてきている。こうした情報が役立つ局面があれば嬉しいのだが、もっともっと必要とされる情報があるのではないだろうか？ 7 月に掲載の要請があって「求人情報」のページを作製した。こういった情報も充実すれば有用であろうが、ソースは会員頼みなので、今後掲載の要請が続かなければ開店休業となる。

そこで、「ホームページ担当」としては、会員の皆さんから web site への提案を積極的に頂戴し、それぞれの提案について学会事務局と実現に向けて検討して行きたい。もちろん、個人のホームページと違い、学会の顔ともなる公式ホームページではいろいろ気を遣うべき制約があるので、内容によってはなかなか実現が難しいこともある。例えば、JADCI は web サーバとして「大学病院医療情報ネットワーク (UMIN)」の無料サービスを利用しているため、広告の掲載などはできない。諸々の問題を予想して、商用サイトとの相互リンクも行っていない。以前、掲示板の設置を提案されたが、これは管理にかなり労力が必要なので対応しきれないと判断した。他学会では実験動物の使用についての多数の書き込みがされて、本来の機能を果たせなくなった例も聞いている。それでも、私や事務局が見落としている実現可能な改善はあるのではないか？

ホームページを立ち上げた一昔前であれば、役に立っても立たなくても学会がホームページを持つことそのものに意味があったかも知れない。しかし、現在は現実に役に立つことが求められる

べきである。web site を上手に活用できれば、学会の運営コスト低減につながる可能性もある。JADCI の web site について、わずかでも機能向上

を進めた上で、次の担当者へ繋いでゆければと思う。

## JADCI・ISDCI 参加記



柴田俊生

九州大学理学研究院

この度、「Transglutaminase-catalyzed Relish crosslinking suppresses innate immune signaling in the *Drosophila* gut」というタイトルで口頭発表をさせていただきました、九州大学理学研究院、学術研究員の柴田俊生と申します。国際学術集会という大舞台に演者として参加させていただくことができ、集会長の中尾美樹先生をはじめ、集会に携わった多くの方々にこの場をお借りして御礼を申し上げます。今回が初めての国際学術集会ということで多少緊張しましたが、おかげさまで楽しく発表することができました。発表後は、国内外の多くの研究者からご質問やご意見を頂戴し、今後の実験方針策定の参考になり、また最新の研究動向をうかがい知ることができ、たいへん嬉しく思うとともに、今まで参加したどの学会よりも、はるかに多くの反響をいただけたことに、ただただ感激するばかりでした。専門的かつ多面的な議論ができるのは、ひとくちに「免疫学」と言っても、自然免疫から獲得免疫、さらにそこから多岐の分野に渡り派生する学問の研究者が一堂に会する、この比較免疫学会ならではの醍醐味だと言えるでしょう。

私はキイロシヨウジョウバエをモデル生物とした腸管免疫研究に従事しております。宿主は、腸内の常在細菌との共生関係を維持しつつ、病原細菌に対する応答と排除を行っています。キイロシヨウジョウバエ腸管では、自然免疫経路のひとつである IMD 経路により、細菌細胞壁由来のペプチドグリカンという分子パターンが認識されます。しかしながら、常在細菌も病原細菌も、同

じペプチドグリカンを有していることに変わりはなく、いかに常在細菌を維持し、病原細菌を排除するのかという点については不明なことが多く残されております。近年、私たちのグループでは、タンパク質の架橋反応に携わるトランスグルタミナーゼという酵素が、腸管免疫の恒常性維持に寄与していることを見出しました。トランスグルタミナーゼのノックダウンにより、過剰な抗菌ペプチド産生が起こり、腸内細菌種が大幅に変化し、ひいては個体の致死が引き起こされます。トランスグルタミナーゼが、常在細菌のペプチドグリカンからの過剰な信号を抑制し、抗菌ペプチドの過剰な産生を抑えることにより、常在細菌は排除されることなく、腸管に維持できるということが示唆されます。免疫経路の制御機構解明を通して、腸内の常在細菌恒常性がどのように維持されているのかという点は、哺乳類にもつながる大きな謎であり、解明しがいのある分野だと考えます。まだ、開始から年数がさほど経っていないプロジェクトであるので、このような学術集会に参加させていただき、多くの刺激を受けることはたいへん励みになります。

また、第 21 回 JADCI から数えて今回が 4 回目の参加でしたが、改めて皆様のレベルの高さと熱心さに感心するばかりでした。こんなにも生き活きとした学会は他に見たことがないように思えます。ざっくばらんとした良い雰囲気のあることだと感心するとともに、ひとつの学術集会としての団結力の強さに驚くばかりです。さらに、ベテラン研究者はもちろんのこと、学生を含めた若

手研究者の活躍も多く目にとまり、私もがんばらねばという思いをさらに強くしました。当学術領域を牽引していける研究をしていけたらと存じます。

末筆になりますが、本研究を推進できましたのは、日頃より熱心かつ親身なる指導をしてくださ

っている川畑俊一郎先生をはじめ、サポートをいただいている多くのメンバーのおかげだと思っております。どうもありがとうございます。また、JADCIの皆様も、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

## ISDCI FUKUOKA 2012 を終えて

長澤 貴宏

九州大学大学院 生物資源環境科学府

2012年7月、ISDCIが12回目の大会にして遂に初の日本開催を迎えました。初のアジア開催もある本大会が我が福岡で催されるということで、兼ねてからここでの発表を一つの目標としてこれまで研究に取り組んできました。初参加の国際学会が慣れ親しんだ地元での開催というのは少々奇妙にも感じましたが、各国の方々を迎える側の人間であるからにはつまらん発表は出来ん！といった意気込みで実験に励んできました。

今回は一発表者としてだけでなく会場のお世話をする学生スタッフとしての仕事もありましたので、発表の準備は勿論ですが、むしろ直前の週などは当日会場で使用する機材や資料の準備、手順の確認といった仕事に追われていた気がします。旅行の下準備などがない分、ある意味では自分の仕事に集中出来たのですが…。会期中は初日の大会受付と、発表会場の準備、運営を中心に行いました。不慣れな英語での対応に戸惑うスタッフも(勿論私を含め…)いたようですが、皆が柔軟且つ機敏に対応してくれたお陰で特にこれといったトラブルもなくプログラムを進行出来たかと思えます。当日感じた率直な印象として、外

国人はデカイ！用意していたTシャツが(日本人にはMサイズでも大きい方なのに)真っ先にXLから売り切れたのは衝撃でした(笑)

私自身の発表は魚類等の血球の一種で、哺乳類の血小板に相当する細胞である「栓球」が、凝固系にはたらくだけでなく、細菌などの異物を能動的に貪食し分解するといった食細胞としての機能を保持している点を示したものです。先生方が宣伝して下さったこともあったようで、思いの他多くの方々にご覧いただく事が出来ました。準備段階での事前の確認、打ち合わせなど正直完璧とは言えない状態の部分もありましたが、皆さん真剣に(笑うところは笑って)聞いて下さいましたし、発表後には沢山の意見、質問、激励を戴き、そうした各国の方々に聞いて頂けることがなにより嬉しかったです。

発表全体を通して印象に残ったのは、好中球によるNETsの形成、Th2型細胞や抑制性B細胞といった、これまでの知見よりも更に踏み込んだ、より高度で複雑な免疫システムの存在を示した報告が多かった点で、比較免疫学全体が次のステップへと進み出している、そんな雰囲気を感じま



した。また今回は初のアジア開催でもありましたが、近年の世界情勢同様、発表を見ている中国の研究者の勢いというものを感じさせられました。一般に勤勉と言われる我々日本人も、世界で戦うためには今一度気合を入れなおさなければならぬと、そんな気持ちにさせられました。

最終日には **Banquet** 会場で鏡開きに和太鼓演奏と、日本文化を楽しんでいただきました。特に和太鼓のラストではステージと一緒に演奏する参加者の方々もいて大いに盛り上がりました。中国人学生との乾杯(=一気飲み、しかも升で)は少々過酷でしたが…。演奏の後には学生演者の表彰式が行われました。Poster、Oral のそれぞれが発表され、なんと私が **Best Junior Presentation Award** を頂いてしまいました！自分が **First Prize** に選ばれたことが全く信じられなくて放心状態のままステージに上がった気がしますが、前会長の **Val.Smith** 先生から表彰の言葉を頂いた際には不覚にも目が潤んでしまいました。自分の研究内容が世界の皆様から評価して頂いたことは一研究者としてなによりの喜びである一方で、それだけの期待をして頂ける以上それに答えるために一層の努力をせねばと、身の引き締まる思いがしました。実際のところ、「裏方仕事頑張ったで賞」の意味もあるとは思いますが(苦笑)その分を含め

ても私達スタッフのはたらきが評価されたことは率直に嬉しかったです。

**V** と **W**。 **Vision** と **Work hard**。先日ノーベル生理学賞を受賞した山中教授が恩師から受けた研究を成功させるのに必要な2つの言葉だそうです。私自身としては地元開催の国際学会を思いがけず最高の形で終えることが出来ましたが、今回の学会で、海外の研究機関で活躍する日本人の方々にもお会いすることが出来ました。自分の将来を考える上で、そうした「**Vision**」を得ることも出来た学会でした。それを形にするためには、今後の「**Work hard**」に全力を注がねば、と思います。そういった意味でも今回の賞は最高の励みとなりました。

最後になりましたが、今回の **ISDCI** への参加は私の所属する水族生化学研究室の中尾実樹教授、柚本智軌准教授のご指導、ご助力により成し得ました。また、スタッフとして協力してくれた中尾研のラボの仲間及び川畑研の皆様の尽力なしには本大会の成功は成し得なかったと感じています。重ねて、福岡へお越しくくださったすべての皆様へこの場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。





## Grief Care - 藤田恒夫先生の死

日本比較免疫学会 名誉会長 古田 恵美子

2012年2月6日月曜日、私の心からなる畏敬と憧憬の“藤田恒夫先生”が永眠されました。新潟大学名誉教授の藤田恒夫先生は、世界的な解剖学者、内分泌学者であり、専門書その他エッセイ風発見物語り、そして同人誌ミクロスコピアで学問と芸術を軽やかに行き来しました。

2月4日（土曜日）、藤田先生は、昼寝中のベッドで脳梗塞に襲われ意識が戻らぬまま2日後に亡くなられました。享年82歳でした。

昨年の暮れ、私は、長年勤務した大学の病院に入院していました。勿論何方にもお知らせすることなしにです。ところが、病室に手紙が届きました。驚いたことにあの“藤田先生”からでした。私の入院に関わった藤田先生の教え子のドクターが早速電話でお話したようでした。やさしいお励ましのお手紙でした。素晴らしい花束も届きました。私は病院の床に穴を掘ってもぐりこみたいほどの気持ちでした。退院直後、先生にお礼の電話をいたしまして、暖かくなりましたら先生のオフィスに伺わせて頂くことにいたしました。

ところがです。“何故ですか？”“どうしてですか？”つい先日、あんなにお元気で“会える日を楽しみにしていますよ。”とおっしゃったばかりですのに！

—————\*—————

1992年、新潟大学佐渡臨海実験所所長の本間義治教授が佐渡シンポジウム“動物の血球”を開かれました。お誘いを受けて、当学会からも沢山の先生方が参加いたしました。帝京大学の山崎正利先生、日本大学の田中邦男先生、宍倉文夫先生、阿部健之先生、埼玉医科大学の和合治久先生、獨

協医科大学の中村弘明先生と私、古田の総勢7名もの大人数でした。2泊3日のシンポジウムは盛会でした。この時初めて藤田先生にお会いし、足が震えるほどの感激でした。藤田尚男、藤田恒夫共著の”標準組織学、総論、各論“の初版（1975）のまえがきにあるように、学生のために基本事項を正確にかつ興味を持って理解できるよう単なる事象の記載だけでなく、それにまつわる歴史や物語を、そして、将来の問題点なども書かれていました。まさに、名著です。初版から我が獨協医科大学の学生たち、勿論私も愛読者になりました。その著者の先生とお会いできたときの感動は忘れられません。2日目の夜の懇親会で新潟の先生方に日本比較免疫学会に入会していただきました。藤田先生は、ナメクジの「マクロファージや粘液」の研究によほど驚かれたご様子で、佐渡から帰って間もなく科学雑誌“ミクロスコピア”にナメクジの研究の事を書いて欲しいとのお手紙を頂戴いたしました。私は、この科学雑誌“ミクロスコピア”を世界一美しいそして世界一素晴らしい内容の科学雑誌であると思っており、喜んでvol.9の3号（1993年）に「なめらかさがくせものナメクジ」を載せて頂きました。

あれから20年、いつしか私は”ミクロスコピア“の同人にさせていただき多田富雄先生や丸山工作先生のお仲間に加えて頂きました。私自身も何篇か原稿を書き、何人かの研究者にもご研究について執筆していただき、また何人かの先生がたには、定期購読していただきました。

さしたる用事も無いのに、何度新潟へ行ったことでしょうか！発作的に新幹線に飛び乗り新潟

駅から“先生今日はお忙しいでしょうか？”と電話したものでした。しかし、先生は、“今日は印刷所で色あわせで忙しいが、そこで待っていなさい。”と駅まで来て下さいました。そんなひとことを、vol.20の3号に“A School of Medaka Oryzias latepes”を書きました。

それは、2003年5月のことでした。この前に参りましたとき藤田先生のお酒を全部飲んでしまい、そのお詫びに新潟迄行き、最も忙しい時期の編集部へ飛び込み、印刷所までもついて行き、そのあと奥阿賀野の新緑美しい山河へ秘書さんの運転でドライブ。そして、その山奥でメダカの佃煮を発見したいきさつを書いたものでした。

東京へオフィスを移されて丸4年後、ミクロスコピアはvol.26（2009年12月）で廃刊となりました。私達東京の飲み仲間は2009年12月9日藤田先生を囲んで浅草の駒形むぎとろで廃刊記念兼忘年会をいたしました。この会が藤田先生とご一緒の最後になってしまいました。

今年3月24日の朝日新聞の夕刊の“惜別”と言

う欄に「解剖学者 新潟大学名誉教授 藤田恒夫さん」の記事が載りました。その中で記憶に残る一文がありました。

「解剖学者の目は、生命の造形の向こうにその結末をも見通していたのかとさえ思わせるのがそれ（廃刊）からの2年だ。解剖学の教科書2冊を改訂し、手帳や住居録を整理し自ら描いた絵のキャンパスを白く塗りつぶして絵を描く後輩らに贈った。」と。世界的な学者として解剖学者として素晴らしいご生涯でした。そして自らは白菊会に献体なさいました。

心美しく優しい先生でした。今私は counselor として心病める孤独な老人の心の声まで耳を傾けて聴く“傾聴ボランティア”です。最近 grief care にも心をくだしているのですが、今まさに私自身が“悲嘆”にくれた人間としてスピリチュアルケアが欲しい一人です。

Grief care はどうなすべきか己の心に聞いているこの頃です。

開催日時：平成 24 年 7 月 9 日 11:00～12:00

場所：ヒルトン福岡シーホークホテル B1

議長選出：吉田 彪 会長

I. 第 24 回学術集会開催状況：中尾実樹 集会長

第 12 回国際比較免疫学会 (ISDCI) 全体の参加者約 250 名 (同伴者を除く) のうち、日本からは 66 名の参加があった。例年より参加者は少ないが活発な会になることを願っている。日本人も“顔を売る”チャンスとして活用して頂きたい、との挨拶。

II. 報告事項

1. 会務報告：中尾庶務会計担当役員

- 1) ニュース発行：2011 年度は発行せず。2012 年 7 月に No.36 を発行。
- 2) 会費の督促 (H23 年度分) は行わず、会費納入状況の調査にとどまった。24 年度に督促を行う予定。

2. 国際比較生理生化学会 (ICCPB2011)における比較免疫学シンポジウムの報告：中尾役員

下記の通り、国際比較生理生化学会 (ICCPB2011)が開催され、比較生理生化学会からの要請により、中西委員、中尾委員の企画のもとに比較免疫学のシンポジウムを行った。JADCI からは倉田祥一朗、笠原正典、中西照幸、中尾実樹の 4 氏が発表した。

日時：ICCPB の開催期間 2011 年 5 月 31 日～6 月 5 日

シンポジウム開催日時 6 月 3 日 14:15～16:45

会場：名古屋国際会議場

企画：中西照幸・中尾実樹

『Evolution and diversity of innate and adaptive immune systems』

- 1) Shoichiro Kurata (Tohoku Univ., Japan): A receptor guanylyl cyclase mediates humoral and cellular responses in *Drosophila* immunity
- 2) Masanori Kasahara (Hokkaido Univ., Japan): Structure and Function of Variable Lymphocyte Receptors: An Update
- 3) Miki Nakao (Kyushu Univ., Japan): Structural and functional diversity of the complement system, an innate immune factor, in fish
- 4) Teruyuki Nakanishi (Nihon Univ., Japan): Diversified isotypes of immune-related genes in teleost

### 3. DCI 誌掲載の Conference Report : 中尾役員

毎年、Conference Report を Developmental and Comparative Immunology(DCI)誌に寄稿している。23rd JADCI の Conference Report は、集会長であった丸山正先生が執筆され、DCI:vol36,p761-762(2012) に掲載済みである旨の報告があった。

### 4. 次期第 25 回学術集会 (2013 年度) についての説明 : 中尾役員、吉田議長

第 25 回学術集会は、集会長浅田伸彦先生のもと、岡山理科大学で開催の予定である。第 24 回(2012 年度)を倉田祥一郎先生(東北大)に、第 25 回(2013 年度)を浅田先生にお願いしていた経緯があったが、今回第 24 回の開催が 12th ISDCI への参加という形になり、東北大での開催は見送られることになったが、第 25 回開催は、倉田先生に順送りをせず、既に準備を進めている浅田先生にお願いすることになった旨の説明がなされた。なお、倉田先生は 2014 年度は都合が悪いため 2015 年度の学術集会を担当する方向で検討しているが未定である、との説明がなされた。

### 5. 会長選挙結果の報告 : 中尾役員

6 月に行われた会長選挙は、6 月 29 日に川畑副会長、中尾庶務担当、柚本補助役員の 3 名で開票が行われ、投票総数 46 票、笠原正典先生が最多の 29 票を得て次期会長に決定した。各役員は、今後笠原新会長の人選により委嘱され、9 月から一新する、との報告がなされた。

## III. 審議・承認事項

### 1. 会計報告と承認

#### 1) H23 年度決算報告

平成 23 年度の決算報告が、次のようにスクリーンで示された。

---

日本比較免疫学会平成23年度決算報告			
収入	前年度より繰り越し		716,938 (円)
	会費(H23年4/1-H24年4/1納入分)		435,000
	(内訳)		
	平成19年度分 (1名)	3,000	}
	平成20年度分 (2名)	6,000	
	平成21年度分 (5名)	15,000	
	平成22年度分 (9名)	43,000	
	平成23年度分 (73名)	363,000	
	平成24年度分 (1名)	5,000	
	第23回日本比較免疫学会学術集会より寄付		463,418
	雑収入(利子)		116
	計		1,615,472
支出	振込送金手数料		100
	学術集会講演要旨印刷経費		218,292
	学術集会補助金		100,000
	通信費		32,698
	(内訳)		
	メール便	31,638	}
	学術集会要旨送料	23,622	
	その他郵送料	1,660	
	文具(事務局用)		3,354
	払込取扱票印字料		600
	会議費		12,920
	計		367,964
	平成24年度へ繰り越し	1,247,508 円	

H23 年度未納者の督促をおこなった。

昨年度横須賀での 23rd JADCI から 463,418 円が学会に寄付された。

2) H23 年度会計監査報告：和合治久会計監査担当役員

会則 7 条 3 項にあるように H23 年度 収入 1,615,472 円、支出 367,946 円は正確、適正に運営されていた旨の監査報告がなされ、拍手で承認された。

### 3) H24 年度予算案

下記予算案が承認された。

#### 日本比較免疫学会 平成 24 年度予算

収入	前年度より繰越	1,237,508 (円)
	一般会費 (5000 円 x 169 名)	845,000
	学生会費 (3000 円 x 7 名)	21,000
-----		
	計	2,113,508
支出	振替口座手数料・振込み手数料	10,000
	第 24 回学術集会経費	400,000
	文具代	10,000
	雑費	100,000
	予備費	100,000
	次年度繰越	1,493,508
-----		
	計	2,113,508

JADCI が企画した三学会合同シンポジウムの開催に関連した諸費用 (会場費) が必要なこと、および例年 JADCI が支出する学術集会講演要旨集を本年度は製本・配布しないことから、本年度は 40 万円を JADCI (学会会計) から 24thJADCI (12thISDCI) へ委託した。(役員会でも承認済み)

比較 3 学会合同シンポジウムの謝金は雑費から支出の予定。

会場からの意見 (鈴木譲会員) : 来年度以降、学会から学術集会への寄付金額をもっと増やし、気軽に集会開催を引き受けられるようにしてはどうか。

#### 2. 会則改正について : 吉田議長

- (1) 現在の会則は役員再任を無制限に認めているが、再任の回数を限定することで負担の長期化が避けられ、より多くの会員が役員を引き受け易く (委嘱を了承し易く) なるよう、下記の改正を提案したい旨の提案がなされ、拍手で承認された。

#### V. 役員

(現) 5. 役員の任期は2年とし、重任、再任は妨げない。会計監査は他と重任できない。

(新) 5. 役員の任期は2年とし、再任は1回までとする。重任は妨げない。会計監査は他と重任できない。

(2) 名誉会員、名誉会長は会則の定めにより年会費を免除されており、通常会員とは違う扱いであるので、選挙権と被選挙権は有さないことと改正（条文追加）したい旨の提案がなされ、拍手で承認された。

#### IV. 会員

(現) 2. 1) 名誉会長・名誉会員は年会費および学術集会費を免除される。

(新) 2. 1) 名誉会長・名誉会員は年会費および学術集会費を免除される。

2) 名誉会長・名誉会員は選挙権および被選挙権を有しない。



## 事務局からのお知らせとお願い

### 第 25 回学術集会の概要

会期 平成 25 年 8 月 26 日（月）～28 日（水）

場所：加計学園創立 50 周年記念館（岡山理科大学内）〒700-0005 岡山市北区理大町 1-1

<http://www.kake.ac.jp/>

学術集会長： 浅田 伸彦 先生（岡山理科大学理学部動物学科）

次号の JADCI News（No.38）で学術集会長の浅田先生よりご案内いただきますし、随時 JADCI ホームページに掲載の予定です。

### 所属・住所が変わったら至急ご連絡を

所属や住所に変更が生じた場合には、学会事務局まで至急ご連絡下さい。E-mail か Fax でお願いいたします。書式は特にありませんので、下記の情報を事務局までご連絡下さい。

氏名、住所、所属、電話/Fax 番号、メールアドレス

### News へのご寄稿を募集しております

エッセイ、学会参加記、JADCI へのご意見・ご提言などをお待ちいたします。事務局までお寄せ下さい。また、News を充実させるため、その構成や編集についてのご意見も歓迎いたします。

### 新会員の入会を歓迎いたします

皆様のお近くに、比較免疫学にご興味の方がおられましたら、本学会への入会をぜひともお勧めいただけますようお願い申し上げます。電子メールで下記の情報を事務局までお知らせ下さい。

事務局メールアドレス：[jadci2office@gmail.com](mailto:jadci2office@gmail.com)

年会費（5000 円、入会金なし）の振替用紙を郵送いたします。

1. 氏名
2. 氏名（ローマ字）
3. 所属
4. 連絡先（所属先か自宅かを明記して下さい）  
郵便番号・住所・電話/Fax 番号
5. E-mail アドレス
6. 専門分野

### 日本比較免疫学会ホームページ

<http://plaza.umin.ac.jp/~jadci/>